

7月8月9月の接遇課題 『気持ちの良いさわやかなあいさつ』

「川嶋みどり先生」講演会を終えて

看護部長 池庄司 和子

当院が主催にて、平成 26 年 6 月 1 日(日)に上記の講演会を開催しました。テーマは、「自然の回復過程を整える看護の力、て・あーての心とわざ」、人間が人間をケアすることの意味と価値。参加者総数は 136 名で、院外の病院、施設、看護大学からも多くの方に参加していただきました。以下に、講演で特に印象に残った言葉を紹介いたします。



●「療養上の世話が行き届いてこそ、患者の自然治癒力が引き出される」

川嶋先生：近年ではその仕事の内容が「診療の補助」に偏り、看護は、その独自性でも専門性でもある「療養上の世話」を捨ててしまったのではないかと感じることがあります。



●「看護師の心のこもった手があれば、生命さえも救うことができる」

川嶋先生：新人看護師時代に受け持ったある少女は、悪性腫瘍で予後不良となり身体はかなり衰弱していました。びっくりするほど全身は垢だらけで 1 週間かけて注意深く部分清拭をしていくと、ある時「看護婦さん、おなかが空いた」と言い、卵粥を食べたのです。数日で命が尽きると思われたその少女は、3ヶ月間病室で残りの生活を送ることができました。



以下にメッセージをご紹介します。

●看護の仕事はハードです。しかし、人間相手のこの仕事は、常に感動と背中合わせであることも間違いありません。看護を語る過程で、その真髄に触れていきましょう！！

⇒「忘れられない」多くの言葉をいただきました。

訪問看護・ヘルパーステーション かもめ 川口 万知子

川嶋先生の 90 分間の講演は、流れるように淀みなく、スーッと私の心に沁みました。「人間が人間をケアする意味は原始の時代も今も変わらないこと」「私たちの手や言葉は、患者の自然な治癒力を高めることができること」等たとえ患者の命の灯が消える寸前であっても、私たちの手を当て、行う看護により命の灯が再び輝くことがあることを、川嶋先生の経験から伝えていただきました。また、「オーダーメイドのケア計画」で、「訴えよりもデジタルなデータに依存し」「個別の背景よりもバーコードで本人確認する」現代の医療を憂い、高度機械的医療や効率優先の医療からの方向転換の重要性を示唆していただきました。今回の川嶋みどり先生の出会いを通じて、今一度自分の手を見つめ、自分の看護を振り返る機会を得ました。この出会いを企画していただいたことに感謝します。ありがとうございました。

「フィジカル・アセスメント」講演会を受講して

3病棟 三行 謙吾

私は 5 月 28 日、尾道市立市民病院集中ケア認定看護師の壇上先生を講師に迎え、フィジカルアセスメント（呼吸編）の研修会に参加しました。フィジカルアセスメントとは、患者の主観的情報と客観的情報を収集し、正常か異常かを判断・評価することです。今回の研修会では、「呼吸の解剖生理を理解し、フィジカルアセスメントを行って、正常呼吸音と異常呼吸音を聴き分けることが出来るようになる」という内容の講義が行われました。その中でも印象的だったのは、2人1組となっていた解剖生理の体験学習です。ビニール袋を被り、鎖骨・胸骨・肋骨・肺の解剖図をお互いに描いたのですが、殆どの参加者の方は正確に描くことが出来ませんでした。呼吸に限らず、「異常」に気付くためには、まず「正常」を知っていなければなりません。そのためには、解剖生理を正しく理解しておくことです。もう一度解剖生理について再学習し、正確なフィジカルアセスメントを行うことが出来るようにしていきたいと思えます。

音楽座ミュージカル「泣かないで」を鑑賞して

放射線科 久田 光明



久しぶりの音楽座ミュージカル鑑賞、国内有数の劇団公演に期待感が高まるばかりであった。音楽座のミュージカルはその期待を裏切らなかった。テンポの良い場面展開、これでもかとダンスを多用し、歌ばかりでなく舞台上に気持ちを引きつけた。原作は遠藤周作「わたしが・棄てた・女」である。しかし、この原作のヒントとなった女性「井深八重」の生き方に心を動かされた。令嬢として生まれ同志社大学を卒業、英語教師をしていたときに「ハンセン病」を疑われ神山復生病院に入院した八重。若干 22 歳、縁談も決まったばかりの幸福の絶頂期の出来事だった。1 年後、八重のハンセン病診断は誤診と分かります。ハンセン病に対して激しい差別のあった時代。この診断結果を聞いた八重が選んだ道は、看護婦として病院に残るという選択でした。八重はここで 81 歳まで働き、ナイチンゲール記事も授与されています。1989 年 92 歳で天寿を全うした八重でした。1956 年にはハンセン病は治る病になっていましたが、日本の隔離政策が解除されたのは 1996 年を待たねばなりませんでした。八重の晩年の言葉が残されています。「この場を与えられた、その恵みに心から感謝する」。八重の人生を知り「絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい」という詩の一節が頭をよぎりました。どんなに深い悲しみの中に身を置こうと、希望は必ずそこに有るのだと。自分自身の生き方が問われているに過ぎないと。「泣かないで」とは、自分を心配する人に「大丈夫」と声返す言葉である。劇中の主人公ミツと八重が私達に投げかけている言葉でもあります。来年も、音楽座は広島に来ます。多くの人にみて頂きたいおすすめミュージカルです。

毎月、委員会で 2 部署が「5 S 活動」への取組を発表しています。



改善前



総務課の 5 S 発表
整理・整頓の作風が
定着してきました。



改善後